

平成 27 年度事業報告書

自 平成 27 年 4 月 1 日
至 平成 28 年 3 月 31 日

I 一般概況

1. 国内の漁獲並びに魚油・魚粉の生産状況

(一社) 漁業情報サービスセンターが発表した 2015 年の主要港(調査対象漁港: 48 漁港) 水揚量によると、サバ類は 48 万 5 千トンで前年比 111%、マイワシは 18 万 6 千トンで前年比 164% といずれも増加した。その一方でサンマの水揚量は 10 万 1 千トンで前年比 50%、また、カタクチイワシは 3 万 4 千トンと前年比 48% に減少した。このような状況下、三陸や北海道などで、これらの魚種の一部が魚油・魚粉の原料に向けられた。

当協会では、昨年と同様に(公社) 日本フィッシュ・ミール協会に魚油・魚粉の生産実績の調査を委託した。

その結果、調査対象となったフィッシュ・ミール工場は 60 社で、全ての工場が稼働していた。生産された魚油は 6 万 1 千トン、このうち、燃料用に 7 千トンが消費され、販売用に 5 万 2 千トンが向けられた。魚粉生産量は 18 万 4 千トンであった。また、処理された原料はラウンドが 8 万 9 千トン、都市残滓・水産加工残滓が 75 万 8 千トン、合計 84 万 8 千トンであった。

2. 輸入実績及び価格の推移

財務省貿易統計によると、2015 年の魚油の輸入量は 2 万 1 千トンで前年実績の 122% に増加した。チリからの輸入量が 1 万 1 千 3 百トンで、続いてモロッコからが 2 千 5 百トンであった。南アフリカからは 2 千 4 百トンの魚油が輸入された。これら 3 カ国からの輸入量が全体の 76% を占めた。モロッコからは過去十数年間輸入がなかったが、このたび久し振りに輸入された。また、魚油の主要生産国であるペルーからの輸入はなかった。

魚油の海外相場(CIF ヨーロッパ US\$/トン) は、オイルワールド誌によると 1 月に \$2,138 で始まり、その後、徐々に値下がりし 6 月には \$1,700 まで下がった。その後は値動きがなく 12 月まで \$1,700 の水準が続いた。

魚粉の輸入量は 22 万 7 千トンで前年比 91% であった。タイからの輸入が 3 万 7 千トン、これに次いでベトナムからが 2 万 7 千トン、エクアドルからが 2 万 5 千トン、ペルーが 2 万 5 千トンでこの 4 カ国で全体の 50% を占めた。タイ、ベトナムをはじめとしてマレーシアやフィリピン等、東南アジアからの輸入が増加している。

魚粉の海外相場(FCA ブレーメン 64/65% US\$/トン) は、オイルワールド誌によると 1 月に \$1,790 で始まり、その後は徐々に値下がりし 7 月には \$1,466 になった。その後は値上がりし 11 月には \$1,537 になったが、12 月に下がり \$1,503 で終了した。

2015 年のドルに対する円の平均為替相場は 1 月に 119 円 27 銭で始まり概ね円安傾向が続き 8 月に 124 円 16 銭まで下がった。その後は円高となり 10 月には 119 円 98 銭となったがその後は下がり、12 月に 122 円 63 銭で終了した。

財務省貿易統計によると、トン当たりの平均輸入価格は、魚油ではチリ産が 17 万 7 千円、モロッコ産が 33 万 2 千円であり、南アフリカ産が 20 万 7 千円であった。輸入魚油全体の平均価格は 24 万円で前年比 103% であった。また、魚粉ではタイ産が 17 万 9 千円、ベトナム産が 15 万 4 千円、エクアドル産が 18 万 8 千円、ペルー産が 21 万 8 千円であり、輸入魚粉全体の平均価格は 19 万 3 千円で前年比 124% であった。

2014年，2015年の魚油・魚粉生産実績

		2014年	2015年	前年比
1. 原料処理量				
ラウンド		88,493トン	89,347トン	101.0%
残滓		770,775トン	758,352トン	98.4%
合計		859,268トン	847,699トン	98.7%
2. 生産量				
		歩留		
魚油		62,467トン	60,632トン (7.2%)	97.1%
魚粉		186,647トン	184,068トン (21.7%)	98.6%
3. 魚油用途明細				
		比率		
燃料用		8,443トン	6,687トン (11.4%)	79.2%
販売用		53,983トン	51,715トン (88.6%)	95.8%
合計		62,426トン	58,402トン (100.0%)	93.6%

注) (公社)日本フィッシュ・ミール協会調査による。稼働工場数：2014年59社，2015年60社。
魚油用途明細合計と魚油生産量が異なるのは，在庫が繰り越されたことによる。

魚油の需給状況

		(1,000トン)					
		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
魚油・肝油		60.5	54.4	59.1	60.0	62.5	60.6
合計		60.5	54.4	59.1	60.0	62.5	60.6

注) (公社)日本フィッシュ・ミール協会調査による。

		(1,000トン)					
		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
魚油		21.3	30.9	44.4	17.6	17.5	21.4
魚肝油		1.1	0.8	0.8	0.9	1.0	1.3
合計		22.4	31.8	45.2	18.5	18.5	22.7

注) 財務省貿易統計による。

		(1,000トン)					
		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
魚油		0.5	0.6	0.7	1.5	5.1	3.5
魚肝油		0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		0.6	0.6	0.8	1.5	5.2	3.5

注) 財務省貿易統計による。0.0：僅少(単位未満)。

		(1,000トン)					
		2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
国内消費食用加工油脂向		8.0	8.0	8.0	8.0	7.0	7.0
その他		65.0	75.0	81.0	69.7	71.5	73.7
合計		73.0	83.0	89.0	77.7	78.5	80.7

注) 日本水産油脂協会による推算。その他には，水産養殖用魚油およびミール工場における自家燃料消費が含まれる。

II 事業の概要

平成 27 年はペルー、チリからの輸入魚粉の合計量をタイ、ベトナムの合計量が初めて上回った。ここ数年続く世界的な魚油・魚粉の価格の高騰などがベースにあり、南米産魚粉は品質の安定性は高いが価格が高い上に安定供給に不安があるため、こうした変化が生じたものと考えられる。

一方、国内産については、マイワシ資源への関心が高まっているが、マイワシは増加期の始まりの様相が認められ、2015 年生まれが太平洋沖合に大量に分布しているとのことである。ラウンドものの原料増に結びつくことを期待したい。

当協会では魚油及び魚粉の生産状況を迅速に把握するため、(公社)日本フィッシュ・ミール協会の協力を得て、各魚粉工場から提供される生産データをまとめる方式で平成 27 年も調査を行った(調査は平成 7 年より継続している)。その他、魚油等油脂に関連するデータとして、国内・国外における漁獲量、各国の魚油・魚粉の生産量、輸出入量及び価格、植物油等の消費量、養殖魚及び養魚飼料の生産量等の収集を行った。また、国内で生産される魚油、魚粉並びに主要港で水揚げされたカタクチイワシ、マイワシ、マサバの栄養成分を中心とした化学分析を(一財)日本食品分析センターに依頼し調査を行った。これらの調査データについては取りまとめを行い『2015 年 水産油脂統計年鑑』として平成 28 年 5 月に刊行を予定している。

広報活動としては、水産油脂資源等に係る講演会を独自に、また魚油の機能性成分等に係る講演会を DHA・EPA 協議会と共催で開催した。若手・中堅の研究者と当協会の賛助員並びに関係者との情報交換と交流を図る目的で水産油脂技術懇話会を開催した。水産油脂資源の講演会については『水産油脂資源講演会』講演集として、水産油脂技術懇話会については講演内容及び質疑応答を『水産油脂技術懇話会記録』としてそれぞれ刊行した。その他、業務に結びつく情報提供として、『JMOA レポート』を刊行した。

1. 国内外の水産油脂及び関連する物資の資源・生産・流通・消費等についての調査

- ① (公社)日本フィッシュ・ミール協会に平成 27 年における国内の原料処理量、魚油・魚粉の生産量・用途について調査を依頼した。
- ② 国内外の資料を収集し魚油・魚粉の生産量、輸出入量、価格並びに消費等のデータを取りまとめた。

2. 水産油脂及び関連物資の機能・性状及び加工利用等に関する調査研究

- ① 銚子港(千葉県)に水揚げされたマイワシ、カタクチイワシ、マサバ及び釧路港(北海道)に水揚げされたマイワシについて一般成分、脂肪酸組成等の脂質成分を分析した。
- ② 国産魚油の性状及び脂肪酸組成等について分析した。また、国産・輸入魚粉についても基礎成分をはじめアミノ酸組成等を分析した。

3. 水産油脂及び関連物資の調査研究並びに啓蒙普及等に係る広報出版

<講演会等の開催>

- ① 水産油脂の資源及び流通に関する講演会
平成 27 年 8 月 21 日(金)、「平成 27 年度水産油脂資源講演会」をアイビーホール青学会館にて開催した。

【演題及び講師】

「マサバ資源の動向と漁業管理」

国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所

資源管理研究センター 資源評価グループ グループ長 渡邊 千夏子 氏

「中国の水産養殖事情 ―海面養殖を中心に―」

三重大学大学院 生物資源学研究所

資源循環学専攻 循環社会システム学講座 教授 常 清秀 氏

「日本の水産養殖の現状と展望 ―市場から見た養殖魚の可能性―」

鹿児島大学水産学部 水産経済学分野

教授 佐野 雅昭 氏

- ② 中堅・若手の研究者と当協会の賛助員並びに関係者による水産油脂技術懇話会
水産油脂技術懇話会を平成 27 年 6 月 26 日（金）及び 11 月 17 日（火）の 2 回、当協会新館
会議室にて開催した。

【演題及び講師】

「第 25 回水産油脂技術懇話会」

「微細藻類による有用脂質生産」

株式会社ちとせ研究所 取締役 光合成事業統括 中原 剣 氏

「第 26 回水産油脂技術懇話会」

「水産未利用資源を活用した医薬・化粧品の開発

～ゼロエミッション型社会の構築に向けて（イシクラゲ、ウニ殻を例に）～」

近畿大学農学部 水産学科 水産利用学研究室 准教授 伊藤 智広 氏

- ③ DHA・EPA協議会と公開講演会の共催
平成 27 年 10 月 23 日（金）に『生理活性物質としての DHA・EPA の機能と動態』と題し
て、アイビーホール青学会館にて開催した。

【演題及び講師】

「体内時計と脂質栄養学」

早稲田大学 先進理工学部 電気・情報生命工学科 薬理学研究室

教授 柴田 重信 氏

「エイコサペンタエン酸エチル（EPA-E）の生体内動態」

高崎健康福祉大学大学院 薬学研究科薬学専攻 臨床薬物動態学分野

教授 荻原 琢男 氏

「日本人の食事摂取基準（2015 年版）：脂質を中心に」

東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻

疫学保健学講座 社会予防疫学分野 教授 佐々木 敏 氏

<出版・広報>

- ① 『2014年 水産油脂統計年鑑』を5月に刊行した。
- ② 『JMOAレポートNo.12 フードディフェンスやリコール問題について』を6月に刊行した。
- ③ 『第25回水産油脂技術懇話会記録 微細藻類による有用脂質生産』を9月に刊行した。
- ④ 資源講演会講演集『平成27年度水産油脂資源講演会』を11月に刊行した。
- ⑤ 『第26回水産油脂技術懇話会記録 水産未利用資源を活用した医薬・化粧品の開発～ゼロエミッション型社会の構築に向けて（イシクラゲ、ウニ殻を例に）～』を1月に刊行した。

4. 土地・建物施設等の賃貸及びその維持・管理

<新館及び本館の建物の賃貸>

- ① 新館3階のマイク設備を4月に更新した。
- ② 新館2階・3階の照明器具のLED化工事を4月に実施した。
- ③ 新館給水ポンプを6月に更新した。
- ④ 本館東側3階の経年劣化により破損した窓ガラスの交換を8月に実施した。
- ⑤ 本館階段、エレベーターホール、エントランスの改修工事を1月に実施した。

5. その他、本会の目的を達成するために必要な事業

<外部団体への協力>

- ① DHA・EPA協議会の事務局を当会館内に置き、同協議会の活動の支援、協力を行った。
- ② (公社)日本油化学会・規格試験法委員会へ基準油脂分析試験法の見直し等のため委員を派遣した。

6. 庶務事項その他

<会 議>

- | | |
|---------|----|
| ① 理事会 | 3回 |
| ② 臨時理事会 | 1回 |
| ③ 評議員会 | 1回 |

<その他>

- ① 内閣府に公益目的支出計画実施報告書を6月に提出した。
- ② 山梨県北杜市大泉町の土地3,430㎡のうち2,355㎡を売却した。
- ③ 賛助員 19名

以 上